

ふざけんな！ と最後まで読まずに
投げ捨てた小説の世界に
転生してしまった

旦那様、あなたは私の夫ではありません

アナ

アベルの屋敷のメイド頭。
アベルが幼い頃から面倒を
見ている乳母代わり。

ハンナ

セントレイ伯爵家のメイド。
マリーローズに絶対的な
忠誠を誓い、
與入れ先までついてきた。

ルイス

伯爵家からマリーローズのもとに
派遣されてきた異国出身の護衛騎士。
美貌と洗練された身のこなしで、
女性たちの注目を集める。

アベル

マリーローズの夫で王女の護衛騎士。
優秀な騎士だが結婚生活よりも
王女を優先したことで、
マリーローズに離婚を迫られる。

エルローゼ王女

カザム国の王女。
アベルに執着していて、
マリーローズとの結婚後も何かと
アベルを王宮に呼び出す。

マリーローズ

セントレイ伯爵家の令嬢。
結婚式の最中にロマンス小説の世界に
転生したことに気づき、
自分を虐げた夫アベルとの離婚を決意する。
勝気で行動的な性格。

目次

ふざけんな！ と最後まで読まずに投げ捨てた

小説の世界に転生してしまった

旦那様、あなたは私の夫ではありません

番外編 ロシエルの受難

ふざけんな！ と最後まで読まずに投げ捨てた
小説の世界に転生してしまった

旦那様、あなたは私の夫ではありません

第一章 祝福ではない、始まりの鐘

「では、魔力石の交換を」

（――は？）

不意に聞こえた言葉の意味がわからず顔をあげると、目の前にラピスラズリ色の髪と瞳をした白人男性がいた。それも、とんでもない美形が。

（えっと、ここどこ？）

周囲を見渡せば、どうやらここは教会のようで、大勢の人間がこちらに注目している。

（……お葬式の最中？）

いや、自分はクリスマスチャンではないし、クリスマスチャンの友達もない。

ついでに言えば、出席者全員が外国人とはどういうことだ？

おまけに全員がドレスアップしている。まるで中世ヨーロッパを舞台にした映画や漫画の世界のようだ。

（正装っぽいけど喪服じゃないってことは――）

認めたくはなかったが、これはお葬式ではない。

私の手にはブーケが握られているし、着ているものはウェディングドレスのようだ。今、交換云々と言った人は恐らく神父だろう。

さらに、目の前の美形は礼装^{モーニング}……ではなく騎士服（？）を着ている。

（今はこういう貸衣装があるのかな……？ まるで詠^{あや}えたように似合ってるけど。でも、そもそも私は今何でこんな格好で、こんなところにいるんだっけ？）

脳内ハテナが多すぎて固まって動けずにいる私に、目の前の美形が語りかける。

「マリーローズ？」

そう呼ばれた途端、一気に脳内に情報が拡散した。

目の前にいる男は、王女の護衛騎士アベルだ。護衛騎士は基本的に既婚者でまとめられているが、アベルは以前誘拐された王女を救出したことから、独身ながら特例で選ばれていた。

だが、王女に外国の王族との縁談が上がり、独身のしかも若い騎士がついているのはまずいという話になった。そこで、王命で婚約者となったのが伯爵家のマリーローズだった。

（――そうだ、思い出した）

前世の私は日本人で会社員、というかいわゆる社畜だった。

神社に行ったらお願いごとをするよりも、「上司^{チャップ}が不幸になりますように」と呪いの言葉を吐くレベルのハードな日々を送っていた。

暗黒な日々の中、私の唯一の楽しみだったのはロマンス小説。気になったタイトルをあらかじめ読

み尽くしたところで、友達から勧められたのがこの『ロゼの幸福』だった。
物語のあらすじはこうだ。

主人公マリーローズは、セントレイ伯爵家の令嬢だった。

内気で本を読むのが好きだった彼女はある日、王命で騎士伯との結婚を命じられる。相手は王女の護衛騎士だったが、マリーローズが以前から密かに憧れている人でもあった。

だから王命による政略結婚だとわかっていても、マリーローズは彼との結婚を喜んだ。

二人で結婚式の準備をしている間、アベルはまめに伯爵邸を訪れ、町に出て一緒にドレスや小物を選んだりもした。

その間、アベルのエスコートは完璧で、マリーローズは毎日彼の訪れを心待ちにしていた。

彼女の笑顔が絶えない様子に、「王命」での結婚を心配していたセントレイ伯爵家の者たちもこれなら結婚後も心配ないだろう、と胸を撫で下ろしたのだ。

だが、結婚生活は悲惨のひと言に尽きた。

夫であるアベルは、何をおいても王女が一番で、家に帰っている時間も短く、会話らしい会話などなかった。何しろ、結婚式ですら王女が襲撃にあったとの知らせを聞き、マリーローズを教会に置いて駆けつけてしまったくらいだ。そのまま何日も帰ってこなかったうえ、何の便りも寄越さなかった。

マリーローズは、そこで思い知った。

彼にとってこの結婚は、王女と自分のラブロマンスを合法化するための隠れ蓑に過ぎないことを。

王女より——いや、他の貴族令嬢や夫人と比べても、マリーローズの扱いはとにかく軽いものだった。任務優先の彼はパーティーでのエスコートすらまともにせず、入場までしかマリーローズの横にはいなかった。

自分の誕生日を祝われたことも、彼の誕生日を祝ったこともない。

結婚式に意味を感じていなかった男だから、当たり前なのかもしれない。

だが、アベルは結婚式の準備期間だけは、なぜかまめに伯爵邸に通って来ていた。

そのせいでマリーローズは彼に望みはあると感じてしまい、結婚後、ことあるごとに彼を引き止めようとした。アベルはその時だけは「わかったよ。時間を取る」と答えるのだが、その約束が守られたことはない。そして、お決まりのように後から「ごめん。仕事が入った」と、朝の挨拶のついでのような詫言のひと言ですませた。

(彼にとつて、私は朝の挨拶程度の存在なのね)

そう思い知って離婚を考え始めたマリーローズは、その頃、皮肉にも懐妊に気付いてしまう。この男は妻としてのマリーローズの立場を守ることは全くしなくせに、聞事だけは欠かさず要求してくてきたから。

「子供ができたと知らせれば、少しは私のことも考えてくれるかしら？」

そう思つて「大事な話があります」と切り出したマリーローズだったが、「わかった。では、今夜」と返したアベルはその夜、帰ってはこなかった。

そしてその夜、邸が襲撃にあった。

アベルは夫としては出来損ないだったが、騎士としての有能さは確かで、多くの犯罪事件を摘発していた。その摘発された組織の逆恨みによる襲撃だった。

仮にも騎士伯の家であるから、守りが全くされていないわけではないが、王城には到底及ばない。常に王城に詰めているアベルには手を出せないとわかった犯罪集団は、アベル不在の邸を狙ったのだ。

門兵や使用人の中には護衛を兼ねた者もいたが、ならず者の集団には多勢に無勢だった。

すぐに巡回していた騎士たちが駆けつけたが、マリローズは傷を負い、お腹の子が流れた。夫に話す前に、夫のせいで傷を負って流産したのだ。

そんな妻のもとに夫が駆けつけてくることはなく、マリローズは絶望した。

既に心を病んでいた彼女は、医師に処方された薬を飲まず、食事もとらずにいたので回復に向かうことはなかった。

「どうせ返事はないのだから」とアベルに連絡することさえなかった。名ばかりの夫が駆けつけてきたのは、まさにマリローズが息絶える瞬間だった。

「マリローズ！」

珍しく焦った様子で駆けよってくる夫にわずかに視線を送ったものの、そこに今までのような愛情はなく、口元には自嘲めいた笑みを浮かべていた。

「あなたと結婚なんか、しなければよかった」

そうひと言だけつぶやいて、マリローズは息を引き取った。

「マリローズ！ 待つてくれ、違うんだ！ 俺は、俺は君を——！」

「ふっざけんなああ!!」

そこまで読んで私は本を投げ出した。

さらに、「あーほーかーあー!!」と叫んで。

結婚した妻をないがしろにして、王女とイチャコラして、挙句の果てにひどい目にあわせて死なせておいて、何が「違うんだ」だよ。

あの後続く言葉が懺悔だろうとただの後悔だろうと、「愛している」であったとしても、マリローズには聞こえない。もう亡くなっているのだから、届くはずがない。

「寝言は寝てから言えよ！」と、続きを読む気にもならなかった。

友人は切ないラブロマンスだと言っていたが、これのどこがラブロマンスだ？ そもそもこの話のタイトルにある「ロゼ」はマリローズのことではない。

王女の名前がエルローゼであることが示すように、これは王女と一騎士の身分を越えたラブロマンスなのだ——たぶん？ いや、最後まで読んでいないのでわからないけど。

この後コイツが、奥方の手を取って延々と言い訳をしたところで、何になると言うのか。全く意味がわからない。

奥方、死んでんじゃん。もう何言っても届かないじゃん？

生きている間に何を言おうとしても、お前が聞かなかったじゃん。

お前が何を言い訳にしたところで、生き返るわけじゃないじゃん？

この切ない言い訳とやらをコイツがしているのは、自分がそうしたいから、楽になりたいからだ。「マリーローズの気持ちはどうなるのよ？」

結婚式から粗雑に扱われて、でも妊娠はさせられて、聞く耳を持たない夫に報告する間もなく、アホ夫への逆恨みで襲撃され、流産するというトリプルコンボ。マリーローズが失意のまま死ぬ瞬間まで見舞いにすら来なかったコイツは、騎士というよりむしろ疫病神だ。

いつそ亡くなったマリーローズの怨霊に呪い殺される、ホラーな結末のほうが数倍マシだった。コイツが幸せになるラブロマンスなんて、誰が読みたいの？ っていうか、誰が許せるの？ 馬鹿馬鹿しい——とか思っていた小説の中に入っちゃったみたいですよ、私。

しかも、よりによってアホ夫との結婚式の最中に。
(あー今すぐこの花束をコイツの顔面にぶつけてやりたい。でもって、こんな結婚やめますって叫びたい)

でも今の私は伯爵令嬢だ。この王命での結婚で、たくさんの列席者を前にそれをやるわけにはいかない。

マリーローズと両親の仲は悪くなく、むしろ良好だ。

マリーローズは大事にされて育った令嬢だった。セントレイ伯爵は王命での結婚話を持つてはきたが、マリーローズが密かにアベルに憧れていることを知っていたからこそ、娘に「断つてもよい」という選択肢を与えなかった。

そのことが、後で大きな悲劇に繋がるとも知らずに。

マリーローズの悲惨な境遇もおそらく知らなかっただろう、彼女は死ぬまで両親をはじめ周囲に訴えることをしなかったから。

だからといって、死んだ後周囲がどうしたかも知らないけど。だって読んでないから！

てか、どうせコイツ、もうすぐ上から呼び出しを受けて結婚式をほっぽりだして行っちゃうんだよね。それまでこの誓いの言葉みたいなの、引き延ばせないかな？ そうすればこの結婚が成立しなくても、マリーローズの責任にはならないし。

悪いのは非常識なアベルと呼び出した王女であって、伯爵家に累は及ばないだろう。そう思ったが、「交換を」と再度神父、いや神官かな？ が促したので、仕方なく魔力石をはめ込んだ意匠違いの指輪を互いの指にはめた。

(ああ、地獄の始まり)

指輪のはめられた指を見てしみじみ思う。

私の表情に何を思ったのか、アベルが声をかけようとしたが、そこへ鋭い呼び出しの声がかかる。

「ロード伯——王女殿下が！ 至急王宮にお戻りを!!」

「何!?!」

「王女宮に侵入者あり、既に怪我人が出ております」

「っ、王女殿下はご無事か!?!」

「ご無事です。ですが、酷く精神的に不安定になられて——」

その言葉を聞くとアベルは「すぐに行く」と「すまない」のひと言だけを残すと、私を置いてその場を後にした。一切振り返ることも、躊躇うこともなく。

きつとアベルは、「えっ……っ」という雰囲気会場が包まれたことにも気付いていないだろう。鈍感力万歳である。

(いくら護衛騎士でも普通、結婚式の日くらいは呼び出しを遠慮するものじゃないの?)

去っていくアベルの後ろ姿に、私は冷めた視線を送る。

結婚し、新しい生活を始めたとしても、自分が毎日目にするのはこんな光景なのだろう。

「馬鹿馬鹿しい……」

小さくつぶやく。

「愚息が申し訳ない、マリーローズ嬢……」

「うちの馬鹿息子がごめんさいね、マリーローズ」

側に寄ってきたアベルの両親が口々に詫びる。

「マリーローズ……」

反対側に行ってきた私の父親も、何とも言えない顔をしている。悪気はなくても、こんな結婚をさせたことはきちんと後悔してほしい。

「王命の政略結婚なんて、しよせん、こんなものよね……」

私のつぶやきを聞いていたのは、両家の両親と、部下の結婚式に最前列で参列していた騎士団の団長夫妻だけだった。

団長は顔を強張らせていたが、隣にいた夫人はそれまで浮かべていた笑顔をすうつと消すと無表情になった。

「……?」

夫人の反応が気にはなったが、私は気付かないふりをして列席者に向かって頭を下げた。

他の列席者の顔は皆能面のようにしか見えないし、神父ではなく神官(?)もブルブルと震えている。

たぶん寒いわけでも笑いを堪えているわけでもなく、怒っているのだ。教会側からしてもこんな結婚式は史上初だろうから。まあ、後にも先にも今回で最後だろうと思うけど。

「本日はお集まりいただきありがとうございます。せっかくお集まりいただいたにもかかわらず、ただいまご覧になったとおり、花婿が逃走、いえ退出してしまいましたので、式はここまでとさせていただきます」

私の発言に、列席者たちが驚きの声をあげる。

「この後の披露宴ですが、私は気分が悪くなりましたので、出席を遠慮させていただきます。私がこのような場で皆様にご挨拶する機会は最後だと思います。この日のために料理人たちが腕をふるいましたので、どうぞ皆様におかれましては先ほどの出来事など気になさらず、ごゆっくりしてください。ではこれで」

そう言っただけで私が身を翻すと、先ほどの団長夫妻のうち夫は腹を押さえて俯き、隣の夫人はいつも面を返上したのか笑顔で拍手をしていた。

(拍手されるようなこと、してないと思うけど……)

ますます意味がわからなかったが、話しかけられるような場面ではないので私はそのまま歩き出した。

「マリーローズ！」

すると、両親が追ってきた。

「何か？」

私はお構いなしに冷たく返す。

「披露宴に出ないとは何事だ？」

「そうよ！ 花婿がないのに、花嫁まで欠席なんて——」

二人とも責めるような言葉を口にするが、ここで責められるべきなのは私ではないはずだ。

「花婿がないのは、私の責任ではありませんわ。結婚式で置き去りにされた花嫁なんて、さぞかし噂好きの方々にとつていい話の種になるでしょうね。だとしても、一体誰の責任でしょうか？」

私の言葉に、ぐっと両親が押し黙る。

(そうでしょう、当事者は私だけじゃなくあなたたちもですからね？)

「この上、まだ私に一人で恥をかけと？」

ダメ押しするように私が続けると、両親は「それは、その……」とか、「だ、だがしかし……」とか、何やらモゴモゴと言っている。

「披露宴会場のお客様のお相手とお見送りは、カイゼル侯爵夫妻とセントレイ伯爵夫妻にお任せ

します。私をあの男と結婚させたのは伯爵なのですから、これぐらいのフォローはしてくださいませよ？ ああ、この花の始末もお願いします。教会の無縁墓地にでも放置、いえ飾ってくださいませ」

私は手に持っていたブーケを伯爵夫人に押しつけると、さっさと控室に引っ込み、楽な格好に着替えて帰途についた。まあ行き先は嫁入り先の家なのだけだ。

(嫌だなあ。あの男、どうせ今夜は帰ってこずに初夜をすっばかすんだよなあ。かといって実家にも帰れないし……ん？)

そういえば、小説ではアベルは今夜だけではなく、結婚してからほとんど家になんか帰ってこなかったんだ。

アベルは表向きは王室から騎士伯を賜った立派な騎士だが、マリーローズにとっては騎士どころかただの疫病神だ。いや、最終的には死なせたから死神か？

夫でもなければ、騎士でもない。名前で呼び合うほど親しくもない。

内心では似非騎士とか馬鹿野郎と呼んでもいいが、今から住まう屋敷はあの男のテリトリーだ。

(マリーローズは小説で使用人に虐められてはいなかったけど、使用人は味方でもなかったよね？あの馬鹿を誰も諫めなかったし、この実家から連れてきたハンナだけが頼りだった)

私は馬車の中で目の前に座る赤髪のメイドを見る。

小説『ロゼの幸福』によると、マリーローズが三歳の時に既に遊び相手としてセントレイ伯爵家に出入りしていたハンナは、現在十七歳のマリーローズより五歳上の二十二歳。

子爵家の令嬢だったが、マリーローズが八歳の時にハンナの両親が亡くなり、実家は没落。マリーローズがとても懐いていたこともあり、そのまま伯爵家に引き取られて正式にマリーローズ付きのメイドになった。

悪くすれば娼館に売られていたかもしれないハンナは、マリーローズに感謝して忠誠を誓い、嫁ぎ先にも付いてきてくれたのだ。

(あの小説の中でも、一人だけアベルの所業に散々怒ってかれてたっけ……)

アベル・ロードは青い髪に青い瞳の美青年で、カイゼル侯爵家の三男だ。

三男ということはつまり、継ぐ家督がない。長男と次男が病弱短命だった場合は別だが、二人とも至って健康であり、アベルに当主の座がまわってくる可能性はない。

それを幼少期から認識していたアベルは、貴族が通う学園を一年で切り上げ、騎士団に入隊し、ただの候補訓練生から見習い騎士、見習い騎士から三級騎士へとあつという間に昇進してみせた。

この国の騎士には等級があり、下から三級、二級、一級と勲功と実績にあわせて上がっていく。王族の護衛は、このうち一級騎士しか採用されない。

順調に階級を上げていったアベルはある日、国境門の警備中に王女を拉致して門を出ようとした誘拐犯に気付き犯人を捕縛、王女を救出した。

麗しの騎士に助けられた王女は深く感謝し、何かとその騎士を頼りにするようになる——というのが二人の出会いだ。まあ、筋が通っていないくもない。

十二歳で騎士団に入った三級騎士がこの勲功により弱冠二十歳で一級騎士に任じられ、後に

“ロード”という騎士伯を賜ったのだから、アベルには騎士としての才覚は確かにあつたのだろう。

この王女誘拐未遂は、国境の門通過待ちの民が大勢いる場での出来事だったから目撃者も多く、二人のロマンスは国民にも好意的に受け入れられた。

だが助けられた王女はこの時十歳、一方のアベルは二十歳の青年だ。ロマンスになりようがないのだが、おままごとのような王女の初恋を周囲は温かく見守った。

年の差もさることながら、身分差もあるこの二人が結ばれる目はない。

王女はいずれ他国の王族に嫁ぐ身であるし、アベルも王女に対して優しい兄のような態度で微笑み、仕えた。

だが、やがて二人が互いを見つめる瞳に変化が生じ——

「——てなストーリーだったよな？」

熱心な読者でなかった私はこの辺りが曖昧だが、王女が十二歳になった辺りで国王が「王女の護衛騎士は既婚者のみが資格を持つ」と言い出し、アベルは王女の護衛騎士を外されそうになる。

王女がゴネて何とか十三歳になるまで引き延ばしたものの、このままでは一緒にいられなくなる。そこで一計を案じた結果がこの結婚だ。

これで条件を満たしたアベルは、結婚後も王女第一を貫き続けるというわけだ。

(妻が家にいることなんか半ば忘れてたろう、ふざけんな。そんなに一緒にいたきゃ駆け落ちでもしろ、マリーローズを巻き込まずに)

小説では泣いてアベルを引き留めたり、病気だと言って家に呼び戻したりと、マリーローズがま

るで二人の邪魔をする女のように描かれていた。

「いやいや、普通でしょ？」

前世で初めて読んだ時もつつこまずにはいられなかった。

妻が夫に「病気だから帰ってきて」とか、「一人にしないで」とか泣くの、普通でしょ？ まだ十七歳だよ？ 非常識なのは人の夫を片時も離さず侍らす十三歳の王女と、それに従う二十三歳の大人と、それを許す周囲でしょっ！

しかもあの似非騎士、子供を作る行為だけはちゃっかりマリローズとしていたなんて、最低！ 王女を想いながらお飾り妻にそれだけは求めるなんてクズすぎる。せめて白い結婚なら、マリローズが流産で死ぬこともなかったろうに。流産も襲撃も、元凶はすべてアベルだ。

でも、アベルに憧れていたマリローズは彼を拒まなかった。

懐妊がわかった時も、「これで旦那様も家に落ち着いてくれるかもしれない」と愛おしそうにお腹を撫でて、「自分で報告したいから」と使用人たちには口止めをした。

だが、結局その報告ができることはなかった。

懐妊がわかってから二ヶ月の間、アベルがマリローズに時間を作ることはなく、ついには件の襲撃により子供は流れ、マリローズも命を落とすとした。これでは救いがなさすぎる。

「アンタ馬鹿だわ、マリローズ」

あんなろくでなしを一途に愛して、一人で耐えて。

「もつと言ってやればよかったのよ」

マリローズが死の床にいる間、さすがに使用人たちも自分たちの主人の薄情さに引いてというから悪感に駆られて、マリローズの世話に必死になり、何とかアベルをマリローズの元に引っ張ってしようと奮闘していた。

アベルは襲撃の報告を受けても「死者がいないのならいい、怪我人の補償等については戻ってから話をする」と言って、戻ってこなかった。同時期に王女宮も襲撃にあっていたからだ。

傷ついた腹を撫でながらその報告を聞いたマリローズは絶望し、息を引き取った。けれど、私はまだ生きている。

「死なないように行動するのは、悪いことじゃないよね？」

そう言いながら、私は抱えていたクッションに渾身の一撃を叩き込んだ。

小説のことを思い出しているうちに、あつという間に家に着いてしまった。

ここはロード騎士伯邸の一画、奥方である私——マリローズに用意された部屋だ。

てつきり主人と二人で式場から帰ってくると思っていた使用人一同は、簡素なワンピースに着替えてハンナと二人で馬車から降りた私に、何とも言えない顔をしていた。

お付きの御者がこの次第を説明すると一瞬息を呑み、一斉に頭を下げた。

「お帰りをお待ちしておりました、奥様」

「疲れたから休む。一人にしようだい」

使用人たちからの挨拶と案内を受けた私はそれだけ返すと、部屋にミルクティーだけを運んでもらって今に至る。今頃は披露宴も終わっているだろう。

式の前の晩は緊張して何も食べられなかったし、披露宴ではご馳走が出ただろうがどうせ食べられなかっただろう。いっそ披露宴に出て客の前でやけ食いでもしてやればよかったかも？

いや、自分が進んで恥をかく必要はない。恥をかくべきなのは向こうで断じて私じゃない。方針が決まれば、ことはシンプルだ。

私は使用人を呼んで温かい食事を部屋に用意させ、ハンナに給仕してもらってお腹いっぱい食べた。

「生きてたら、お腹空くもんねえ……」

小説の中でマリーローズが幸せそうに食事をする場面はなかった。

唯一あるとすれば、結婚準備中にアベルと一緒に町に出た際に、お洒落なカフェでケーキセットを頬張ったくらいではなかったろうか？ ていうか、むしろそれが最後じゃない？ ここに嫁いできてから食事を美味しく感じることもなくなってなかったんじゃないかなろうか。

「あの男、妻がやつれていく姿に全く気付かなかったわけ？」

いや、聞きの時しか会わないなら見た目の変化なんか気付きようがないのか……？ 体に触れているならむしろ体型の変化くらい気付きそうなものだが。よほど妻の体調に興味がなかったのだろう。

「ま、いいや。明日からもしつかりいただく」

デザートに取りかかろうとすると、完璧に給仕をしていたハンナが言いにくそうに言葉を紡つむぐ。

「あの、お嬢様……？ そんなに一気に食べられては……」

「いいのよ、今日まで緊張してろくに食べられなかったのに結果がコレですもの。体力はつけてお

かないとね」

例えば、突然帰ってきて「初夜だ」とか言ってきた馬鹿夫を蹴り上げてやるためにね！！

そう考えつつ、私は千切ったパンを口の中に放り込んだ。

「ですが、あの、今夜は……」

「——今夜がどうかした？」

「旦那様、いえロード伯もまもなくお戻りになるのでは？」

「あっ」

（そうか。ハンナはヤツが今夜どころか数日間戻らないことを知らないのよね……ハンナだけじゃなくこの邸の使用人たちも知らないか）

だから食事を頼んだ時、怪訝な顔をされたのか……ふむ、今のうちにはつきりさせておいたほうがよさそうね。

「この使用人を一ヶ所に集めてちょうだい。全員ね」

デザートまで食べ終わった私は、紅茶を飲み干しながらハンナに頼んだ。

邸の玄関ホールに集められた使用人たちは落ち着かなげにざわついていた。

それはそうだろう、何しろ数時間前に初めてこの邸に嫁いできた女主人にいきなり、「使用人は、火を見ていたり手が離せない者以外は全員集まるように」と命じられたのだから。

馬車から降り立った時から決して上機嫌とはいえなかった私の命令に、家令をはじめとした使用

人たちの表情は一樣に暗い。

そんなこと、私は知ったこっちゃない。恨みは主人にぶつけてくれ。

「えーと、さっき話したとおり、結婚式の途中でいなくなってしまったこちらの御当主は、今夜はお帰りにならないわ。何日留守にするかも私は一切聞いていないのでわからないけど、あなたたちは気にせずいつも通りの仕事をして。ブーケも飾らなくていいわ。結婚式も中断してしまつたし不吉だから、教会で捨て……いえ、寄付してきたから気にしないで結構。私も今夜はもう休むから世話も不要よ。もしロード伯から連絡があつたら、ええと——まあないとは思うけど？ 知らせてちょうだい、では、解散!!」

言いたいことだけ伝えようと、私はさっさと部屋へ引つ込んだ。

side ロード伯邸、フットマン従僕

「ええ……」

興入れしたばかりの奥様に集められ、何かかと思つたらまさかの「夫不在なので初夜はありません」宣言をされた。

俺は今夜ベッドサイドに置くワインを時間をかけてじっくり選んだところだった。

この邸の台所を預かるシェフはもちろん酒にも詳しいが、フットマン従僕の一人である俺がマニアの域に達

しているため、酒類に関しては俺が任されることも多く、今夜は俺に一任されていた。今夜は嫁いで来る奥様が酒に強いかわからず、めいぶ酩酊してしまつては意味がないため、甘くて飲みやすいがそれなりの度数のものと、度数は低いが美しい色のシャンパンの二種類を用意した。どちらも女性が好みそうなものだ。

旦那様はお酒に強いが銘柄にはこだわらないので完全に奥様に合わせて選りすぐつたはず、……だったのだが。まさかの宣言に、俺をはじめ色々を用意していた使用人たちは肩を落とした。

そもそも、旦那様と奥様は笑顔で手を取り合つて馬車から降りて来るものとはかり思っていた。初夜に緊張する奥様を和ませようとあれこれ用意していたのだが、全く出番がなく今日が終わってしまうなんて。

中でも特に落ち込んでいたのは、ブーケを任される予定だったメイドだ。

結婚式を終えて晴れて嫁いできた女主人が手にしたブーケは、邸をあげて女主人を歓迎するとう意味を込めて、客人が一番に目にする玄関ホールに飾る慣わしがある。

だからセンスを見込まれてブーケを任される予定になっていたメイドは、一番華やかな花瓶を用意して待機していた。

にもかかわらず、邸に到着した奥様はブーケを手にしていなかった。そもそもエスコート役の旦那様が不在な時点でおかしかったのだ。

それでも、結婚式のブーケはかさば嵩張るのでつきりメイドが預かつているか、別に運んだのかと

思ったのだが、ブーケは教会に寄付してきたという。

「そんな……ご主人様、奥様をここに迎えることをあんなに楽しみにしておられたのに……？」
メイドが納得いかなそうにつぶやいたが、その声は奥様に届くことなく、ホールのざわめきにかき消された。

第二章 聖なる騎士の頭上に花（と水）を

部屋に戻った私は、お腹いっぱい食べてさっさと眠りにつくことにした。

夫が帰ってこない確信があるのだから気楽なもので、部屋に用意されていたひらひらのネグリジェなど見向きもせず、実家から持ってきた一番楽な部屋着に着替えてぐっすりと眠った。

翌朝。

「……様」

ベッドに寝ている私に向かって誰かが呼びかける。

「——様！」

（うん何よ、うるさい……）

「お嬢様！」

体を揺すられる感触を無視し続けていると、ハンナの叫ぶような声で目が覚めた。

（あ、そっか。転生しちゃったんだっけ）

ようやく自覚してぱっちり目を開ける。

「お嬢様、お休みのところ申し訳ありません。ロード伯がお戻りになったそうです」

「はっ？」

(あれ？ 結婚式の後何日も帰らないはずじゃなかったっけ、記憶違いかな？)

時計を見ると朝八時半を示していた。寝ついたのが夜の十一時過ぎだったから、結構な時間寝たことになる。

(まあ、結婚式の前日は三時間くらいしか眠れなかったから仕方ないよね？)

頭の中で自己弁護する。

「そう。それで？」

帰ってきたところでいきなり私を起こせと命じてきたのかと呆れつつ、ハンナに続きを促す。

「早くお支度を。朝食をご一緒に待っておいでです」

「!?」

(朝食？ そんなの一緒にとったことなんて、二三年間の結婚生活の中ではぼなかったじゃない！小説にも『朝食にしろ夕食にしろ、共にした回数はこの二年間で本当にわずか』ってマリーローズの独白があったよね!?)

混乱しつつ、社畜読者だった頃の記憶を漁る。

単に描写が少なかつただけかもしれないけど……そもそもこの邸で顔を合わせることも自体少なかったのよね？ マリーローズが寝てから帰ってきて、起きる前に仕事に行くようなヤツだったから。

それなのに子供ができたってよくよく考えたらおかしいんだけど、いやそもそも冒頭からおかしいんだけど。昨日私が行動を変えたからヤツの行動も変わったのかな？

「待たずに、勝手に食べて出掛けたらいいのに」

(何でわざわざ待ってるの？ そんなこと、するキャラじゃなかったのに……)

「さすがに昨日のことはまずかったと思ってるのでしよう、当たり前ですが。どちらをお召しになりますか？」

ハンナが目の前に数着のドレスを広げる。

普段着用のドレスだが、それでも貴族の夫人用だから前世の正装と比べると格段に手間がかかりそうだ。

「……一番楽で早く着られるものでお願い」

「一番早く着られるものは、この淡いオレンジ色のドレスですが、よろしいのですか？」

遠慮げにハンナが言うのは、馬鹿野郎の青でなくてよいのかという意味だろう。

夫や婚約者の色を纏まとったり、差し色にしたりするというこの国の暗黙の了解を、マリーローズは積極的に守っていたからだ。

マリーローズの濃い金髪とフォレストグリーンの瞳に合うかは別として。

(いや、マリーローズは美少女だから何でも似合うんだけど。あそこまで青にこだわって全身コーディネートしなくたっていいと思うのよ……)

それだけあいつのことが好きだったんだろうけど、本当はマリーローズの好きな色は赤やピンク、オレンジなどの暖色系だ。夫に合わせて寒色系ばかり着ていたけれど、オレンジやピンクだつて着たかったはず。

(似非騎士がマリーローズに合わせたことなんてないんだから、これからは一切そんなことしない)

そう決意すると、私は「これにするわ」と淡いオレンジ色を選んだ。

オレンジ色のワンピースを纏まとって食堂に入ると、アベルがお誕生日席、ではなく主人の席に座っていた。

「おはようございます、ロード伯爵様」
お待たせしてすみませんとは言わない。約束していないし、アンタのために早起きする価値はないから。

どこまで顔に出ていたかわからないが、欠片も笑顔でないことくらいはアベルもわかったのだらう。

「あ、ああ、おはよう」

やや慌てた声が返ってきた。

「お早いお戻りですね。てっきり数日はお帰りにならないかと思っておりましたのに」

(本音を言えば、別に帰ってこなくてよかつたんだけど)

「いや、そういうわけにも——昨日はすまなかつた」

「いえ、(私より) ずっとお仕事のほうが大事なのでしょうから」

「わかってくれて嬉しいよ」

私は精いっぱい皮肉を込めてにつこりと笑った。

(嬉しいわけあるか、そこは「そんなことはない」とか、口先だけでもフォローするところでしょうがよ！)

私の内心の怒りに一切気付かないのか、アベルは何を勘違いしたのかにこと微笑んだ。一方で、控えている使用人たちは青ざめた顔になり、ダイニングに冷たい空気が漂っていた。

(本当に、ニブい人ね……)

「ロード伯の顔を見たら食欲がなくなりましたので、これで失礼します。ではごゆっくり」

私は座ったばかりの席から立ち、ダイニングを後にした。

「なっ？ 急に具合が悪くなったのか？」

似非騎士が立ち上がる気配を感じたが、私は振り向かず部屋に戻った。

ハンナもそれを止めることなく、呆れた様子で私の後に従った。

ダイニングにいた使用人たちも、自身の主人に残念なものを見るような視線を投げかけていたが、当人は気付いてないのだろう。



「まったく……！ 結婚式をすっぱかしておいて『すまなかつた』のひと言ですむと思ってるんですか、あの男は!? 宝石か、せめて花束を捧げて三つ指ついて謝るのが筋つてもでしょうに！」

部屋に戻るなり、ハンナが怒鳴り散らす。

「ロード伯にとつてはその程度の認識なのでしょう、結婚式なんて。……まあ、突然抜け出すくらいなら、あんなに入念に準備なんてしなればよかつたとは思っけれど」

王命だったから婚約期間はほぼなかつたけど、結婚式の準備期間はあつた。

その間、衣装合わせや花選びなどに彼は協力的だつたし、時々笑顔も見られた。だからこそ期待してしまつたのだ。

あんなふう置き去りにするくらいなら、結婚式などはならしななければよいものを。そう思つて息を吐くと、横でハンナが怒りを爆発させる。

「お嬢様は何でそんなに冷静なんですかつ?!」

「しよせん王命による形だけの結婚と割り切つてしまえばこんなものよ、単に住む所が変わつただけと思えばいいわ」

「お嬢様……」

主人の諦念を感じとつたハンナが痛ましげな顔になる。

「申し訳ありません、奥様」

部屋の扉がノックされ、茶菓子を手に入室してきたメイド頭が声をかけてきた。

「坊っちゃま、いえ当家の主人は幼い頃から騎士として身を立てることに精いっぱい、こういうことには疎くいらつしやるのです」

ヤツが王女と初めて会つた時つて、二十歳^{ハタチ}じゃなかつたつけ。

思春期の少年じゃあるまいし、疎い^{ヒトリ}ですむ年齢なんてとつくに過ぎてると思つけど。

まあここで「あ、そう。どうでもいいわ」と返すわけにもいかないので、一応話を振る。

「次はいつお帰りになるのかしら? 何か言つていらした?」

「今夜はできるだけ早くお帰りになると言つておられました。昨日の埋め合わせをしたいと」

「埋め合わせ、ねえ……」

結婚披露宴の埋め合わせなんて、しようがないと思つけど。

「まあ! ちゃんとする気があつたんですね。ならよかつたです」

うーん、ハンナの期待どおりのことではたぶんないと思つ。

あの似非騎士にそんなデリカシーがあるわけないとわかつているから、期待せず夜まで待つことにした。でも、あの馬鹿はその予想を超えてきた。

「ただいま! マリーローズ!」

そう叫び、妙なハイテンションで帰つてきた似非騎士は花束を手にかけていた。可愛らしいピンクの薔薇の花束を。意外すぎて絶句していた私に、アベルは花束を差し出す。

「これを君に」

花束を反射的に受けとつた途端、体ごと抱きかかえられてしまった。

「部屋の用意はすんでいるな?」

使用人が目を白黒させつつ頷いた途端、そのまま夫婦の寝室に連れて行かれ、ベッドに降ろさ

れた。

「——何の真似ですか？」

「決まっているだろう？ 初夜だ」

冷め切った声で一応尋ねると、のしかかってきたアベルの息は酒臭かった。

（一杯引っ掛けて帰ってくるなり、いきなり人を寝室に連れ込んで「初夜」だあ？）

私はベッドサイドに置かれた水差しに手を伸ばすと、目の前の男の顔面に中身を思いっきり浴びせた。

ピシャン。

頭のとっぺんから水を滴らせながら似非騎士は固まっている。

「酔いは覚めましたか？ まだなら花瓶の水もお見舞いしましょうか？ ついでにお花も」

（頭に花が咲いてるアンタにはお似合いよ）

「マ、マリーローズ……？」

呆然とつぶやく似非騎士は未だに状況把握ができていないようだった。

「まだ酔いが覚めないようですね。ハンナ！ 家中の水の入った花瓶を持ってきて！」

「かしこまりました、お嬢様」

気配なく背後に控えていたハンナは蛆でも見るような目でアベルを一瞥すると、私に礼儀正しくお辞儀をして部屋から出て行くとした。

「お嬢様、私が戻る前に何かあった場合にはこれを」

扉の前まで行って何か思い出したように引き返し、ハンナは掃除用の柄の長いモップを私とアベルの間に挟み込むようにして手渡した。

「この距離をちゃんと保ってください。でないと、うっかり背後から旦那様の脳天に花瓶を叩きつけてしまうかもしれませんから」

「ありがとうございます」

そう言っただけでモップを受け取ると、満足げに頷いて出て行った。

私はモップの先を似非騎士の鼻先に向ける。

「さあ、少しは酔いが覚めましたか。それでは、いくつか確認してもよろしいですか？ ロード伯」

「確認だと……？」

「はい。ロード家、いえカイゼル家では妻に迎えた女性をこのように扱うよう、教育を受けるのですか？ どちらにせよ、カイゼル侯爵夫妻に確認しなければいけませんね」

「このような……？」

「はい。結婚式から突然いなくなって、そのまま帰ってこずに諸々自分の都合ですつ飛ばしたまままともな会話一つないのに、いきなり酔っ払って帰ってきたと思ったら人を寝室に連れ込んで『初夜をやるぞ!!』とかほざくことです」

「あ……！ いや、これはその、初夜がまだだと知った同僚たちが『勢いが大事だから一杯引っ掛けて行くくらいがちょうどよ』と……」

勤務中に何の話してんだよ。

「騎士団って暇なんですか？ とても忙しいとかかかっておりますが」

「ひ、暇ではない！ ただ同僚たちに結婚したことを冷やかされて、その、そういう話になってアドバイスを……」

「何のアドバイスですか。言っておきますが、顔を見て挨拶するなり抱き上げてベッドに直行って、連れ込み宿の常連の所業ですからね？ そんな所での男同士の常識を私に適用しないでくださいませ。それとも、他でもないセントレイ伯爵夫妻とそういう契約でも交わしておられるとか？」

「契約……？」

「嫁いだ娘をどう扱っても当家は関知しないので好きにして構わない、つまり娼婦のように扱っても構わないと？」

「なっ、そのようなことはない!! 我が家では嫁いできた女性に酷い仕打ちをする習慣などないし、あなたのご両親からそんなことを言われてもいない！ ただ『娘を頼む』と……」

「それにロード伯は何て答えたのです？」

「もちろん『任せてください』と答えた。当然だ！」

「その、任せる……って体のことだけだと思ってます？」

「そんなわけないだろう！ 私たちはもう夫婦だ！ こ、ぶっ!？」

言いながら顔を近づけてきたアベルの鼻先に、私はモップの毛がついたほうを押しつけた。少し汚れているが仕方ない、モップだし。

ついでにそのまま濡れた顔を拭いてあげた。さっき水をかぶって濡れているからちよいどいいと思っただけだ。

「ごほっ、マ、マリーローズ、やめ……」

毛先に埃が^{ほこり}ついていたらしく、目の前の馬鹿はむせていた。このままモップで頭の中も拭いたらよかったのに。

「では、これ以上近づいて来ないでください。さっきハンナにそう言われたでしょう？」

「だ、だが」

なぜ自分の邸で使用人に指図されねばならないのか、納得のいかない顔でアベルは言い返そうとした。

「———というか、いい加減そこから退いてください。お嬢様が濡れるじゃありませんか」

氷点下の声が背後から降ってきて、アベルは再度固まった。ハンナが戻ってきたのだ。水のたっぶり入った花瓶だけでなく、^{たらい}盥や新しい水差し、ティーポットなど、水が入るあらゆるものを集めましたという感じのワゴンを引いて。

side ハンナ

部屋を出た私がいましたのは、本来なら緊急時にしか使わない銅鑼^{どら}を拝借して打ち鳴らし、使用

人を集めることだった。

「緊急事態です！ 皆様手を貸してください!!」

叫びながら邸内を徘徊すると、一分足らずで多くの使用人たちが集まってきた。

（使用人の教育はちゃんとできているみたいなのに、あの馬鹿ときたら——はあ）

「な、何事ですかハンナさん」

「坊ちゃ、いえ旦那様に何かあったのですか？」

私がおもむろにため息をつくとき、やって来た家令とメイド頭が慌てた様子で声をかけてきた。

「モンドさん、こちらのご当主が乱心してこのままでは奥様が危険です。腕に覚えのある者を三名ほど連れて夫婦の寝室へ向かってください」

「ら、乱心……？」

「お酒を過ぎて凶暴化しているのです」

「なんと……！ かしこまりました、直ちに」

そう言うと、家令のモンドさんは急ぎ足で動き出す。

「マリアさん、この家の閨教育はどうなさっているのか伺っても？」

「ね、閨教育……!? それは私の担当では……」

「それはわかっています」

普通、閨教育にはその道のプロのお姉さんの手解きがつくものだから、乳母に近いこのメイド頭は関与していないだろう——だがあれはない。

「ほ、本当に坊っちゃまが奥様に無体な真似を？」

「ええ。ですので、もしかしてそのあたりの教育を受けておられないのかと」

そう言いながら、私は銅鑼を叩く用の棒で自分の肩をポンポンと叩く。

この時の私はかなり目つきが悪くなっていたのだと思う。一介のメイドにすぎない私より格上であるはずの使用人たちが皆で固まって、質問に怖々といった顔で答える以外、何も言ってこなかったからだ。

まあ確かに、ここで威丈高な態度でも取られようものなら、私だってただじゃすませなかっただろう。

『ああん？ 自分たちの主の失態を柵にあげて何言ってやがるんですの？ 先にあなたたちの頭をこの棒でかち割って、どんな音がするか確かめたくなくなってしまいますわ!』

そのくらい言っていたかもしれない。

「そんなはずは……」

メイド頭のマリアさんがかううじて言葉を発した。

『どうぞご自分の目で確認なさってください。あと集まってください皆様!! 家中にある花瓶や盥やティポットなど、水を入れて運べる物をできるだけたくさん集めてきてください。あと、それらを載せて運べるワゴンも。あつ、中は水でいっぱいにしてきてくださいねー!』

私は使用人たちにそう告げると、マリアさんに向き直る。

「私どもは部屋の前で待機を……あ、タオルはどこでしょうか？ 一番上質なものと一番使い古し

たものをお借りしたいのですが」
そう頼むと、部屋の前で他の使用人たちを待ち、ワゴンを受け取って部屋に突入した。



部屋に戻ってきたハンナの背後には、非常に顔色を悪くした家令のモンドとメイド頭のマリアが控えていた。目の前の惨状から、何があったのかあらかた察したのだろう、二人はとても残念なものを見る目をしていた。

さらに、なぜかモンドの背後には邸の護衛を兼ねる屈強な使用人たちが控えている。

アベルは「なぜだ？」とでも言いたげに眉を顰めて^{ひそ}いる。たしかに、ここは夫婦の寝室だ。使用人が軽々しく入っていい場所ではない。

「お前たち……」

アベルが言いかけると同時に、ハンナが花瓶を振りかぶる。

「あ、いや——まず話を聞こう」

ハンナの様子に怯んだのか、アベルが慌てて手でハンナを制する。

「話というのは普通、ベッドに連れ込む前にするものです」

ハンナはコトと静かに花瓶を下ろした。

「遅くなりまして申し訳ありません、お嬢様。無事でようございました」

そう言いながら、上質なタオルで私にかかった水滴を優しく拭う。

「マリアさん、坊っちゃんはお任せします。私はお嬢様付きのメイドですので」

ハンナは氷点下の声音を保ったままマリアに指示した。本来なら上司に当たる相手だが。

「は、はい」

指示されたマリアは、まさか手に持ったポロポロのタオルがこの邸の主人であるアベル用だとは思わなかったのだろう。

だが、この時のハンナには何か逆らえない雰囲気があり、マリアは言われるまま従った。

マリアは濡れ鼠^{ねずみ}になっている主をタオルで拭きながら、アベルに尋ねた。

「一体何をやらかしたのですか？」

だが、答えたのはハンナだった。

「皆さんも見ていたでしょう。この男は帰ってくるなり、いきなりお嬢様をベッドに連れ込んであらぬことをしようとしたのです」

「いや、俺は初夜をしよう……」

「同僚の皆様と一杯引っ掛けて盛り上がって、お酒臭い息で帰ってくるなり、ですね。私は買われてきた娼婦か何かですか」

アベルが口を開いたので、私はすかさずつつこむ。

「——は？ そんな経緯で？」

たちまちアベルに使用人たちの非難の視線が集まった。ハンナ不在の間にした会話をここで報告

すると、ハンナだけでなくモンドもマリアも呆れ返った視線を向けた。

「ご主人様、それはあまりにも……」

「いくら何でも酷すぎます」

長く仕えるはずの用人人たちは、口々にアベルに非難する視線を向ける。

「結婚式はすんでいるのだぞ……?」

心外そうにアベルが返す。

「結婚式がすんでいる、いないの問題ではなく……」

「女性はそのように扱ってよいものではありませんよ?」

「披露宴と初夜をすっぽかして他所よそに行つたヤツが何を」

「あいにく結婚式で挨拶したのは私だけですわ」

三者三様の返しがされる。モンドの背後に控える護衛役の用人人たちは、「見てない、聞いてない」を貫こうと決めたのか、必死に空気なるうとしてしている。いや、ガタイがよすぎて無理でしょ。

「大体、なぜお前たちがここに?」

ようやく大柄な用人人たちに気付いたのか、アベルが詰問きつもんする。

彼らは普段は従僕として働いているが、夜には邸内外の見張りとして門や玄関ホールの外側で目を光らせているはずなのである。

「……ハンナ嬢が奥様の身が危ないのでそうせよと」

「——何だと?」

アベルはなぜ邸の主人である自分より、メイドであるハンナの意向が優先されるのだとも言いたげな表情で口を開こうとする。

それをさえぎるように、ハンナがびしゃりと言いつつ。

「水と白湯、どちらがよいですか?」

ハンナの言葉にアベルはびくりと反応し、慌てて身構える。

「ま、待て……!」

おびえるアベルを無視して、私はハンナに声をかける。

「温かいお茶が飲みたいわ、ハンナ」

「かしこまりました」

応じたハンナはそつのない仕草で私好みのお茶の葉を用意をし、おもむろにティーポットからカップに注ぎはじめた。

「似非騎士……いえロード伯は冷たい水と氷、熱湯、煮えたぎった油のどれに致しましょうか?」

「なっ!? 私にそんなものを飲めと言うのか!!」

「飲みたかつたらご自分で淹れてください。——いかが致しましょうか、お嬢様?」

お茶のカップを手渡しながら、「このゴミ、どこに捨てましょうか」と尋ねるようなテンションで私に問う。

「煮えたぎった油? あなた、そんなものまで持ってきたの?」

「たまたま調理場で仕込み中だったそうで」

モンドも MARIA も他の使用人たちも、自分たちの主人が結婚式をすっぽかした挙句、盛大にやらかしたことだけはわかるようで何も言えずにいた。

「獣けだものの下半身が暴走した時には、荒療治が必要かと」

一応先ほどまで「ロード伯」だった邸の主人の呼称が、ついに「ゲダモノ」になった。「とりあえず座ってきちんとお話を」

「愚かなこちらのご主人が暴走しないように、あなた方がきちんと見張ってくださいるなら」仕方なげに頷き、一旦私たちは全員がソファに座った。

私とアベルはもちろん対面で、アベルの隣にモンド、私の両側にハンナと MARIA、そしてアベルの背後に屈強な従僕が二人立っている。

まるで犯罪者のような扱いにアベルが抗議すると、「ならば話し合いの余地なしです」とハンナに一刀両断されてしまう。

「ここはハンナ嬢の言うとおりに」

MARIA もこちらについたため、アベルは不承不承ながら受け入れた。

ハンナの近くには煮えたぎった油を入れた罌たらひや熱湯が入ったティーポット、水が入った花瓶などを載せたワゴンが置かれたままである。

私にお茶を出した後、ご丁寧に膝の上に花瓶を抱えて座っている。

「なぜ花瓶なんだ？」

ハンナの膝の上の花瓶を苦々しげに見ながら、アベルが尋ねる。

「水差しに入っているのは、きちんと適温に沸かされたお湯か大事な飲み水です。無駄にしてはいけません。油じゃないだけ感謝してください」

まるで「貴様にかけるのに真水ではもつたない」とでも断言するような言いぶりだった。

それを聞いてアベルは閉口したが、何よりその横で一切メイドを咎とがめる様子のない私に驚いているようだった。

結婚式前と違い、ハンナと同じく軽蔑に染まった瞳でアベルを睨みつけているのだから当然だろう。

「マリーローズ……」

「何か言いたいことがあるならどうぞ。今ならお聞きしますわ。私も言いたいことがありますので」

私の嫌味が通じなかったのか、アベルはやや安心した表情を浮かべた。

「その、すまなかった」

そう言いながら頭を下げる。

「どれに対する謝罪ですか？ それ」

私は心底不思議そうに問う。

「ありすぎて列挙したらキリがないんじゃないですか？ まあ、どれも『すまなかった』のひと言ですむ範疇はんちゆうはどうを超えていますか？」

「俺、いや私は君を粗略に扱ったつもりはなくて……」

「——アレが正解だったとでも？」

ハンナが再度花瓶を振りかぶるのを手で制す。

「では、お話は一つです、離婚してください」

「なっ!?」

「王命での結婚は果たしました。離婚するなどは言われておりません。私はこんなふうに使われる生活はごめんですが、ロード伯はそれが正解だと仰る。話し合いの余地はありません。離婚しましょう」

絶句する主人に代わって、モンドが身を乗り出す。

「し、しかし……！ 結婚してすぐに離婚となりますと奥様の体面にも傷が！」

「いいのです。あの結婚式で既に私の体面など完全に潰されています。今さら上乗せされたところで痛くも痒くもありませんわ」

私は精いっぱい優雅に微笑む。

コイツに穢けがされて死ぬよりはるかにマシだし、そもそも私はこの先、公の場に出て社交をするつもりも全くない。

「ご立派な決断です、お嬢様！」

ハンナが拍手をすると手にしていた花瓶が落ちそうになるが、マリアがキャッチしてことなきを得た。

花瓶を手にしたままマリアはモンドと顔を見合わせ、同時に主人のほうに目を向ける。

当のアベルはというと、「騎士の中の騎士」と呼ばれた面影もなく、視線を私に固定したまま、完全にフリーズしていた。

待つこと数分、ようやくフリーズが解けたアベルが呆然とした表情で口を開く。

「離婚——だと？」

「はい、離婚です。そんなに難しいことは言っておりませんでしょう？」

「私たちは結婚してまだ三日目だぞ？」

「その三日間……といえますか、初日からロード伯が表向きすらまともな夫を演じる気がないのはよくわかりましたから。離婚が妥当です。次は最初から契約妻を求めねばですね、既婚者という肩書きが欲しいだけなのでしたら」

「馬鹿なことを……俺の妻は君だけだ！」

「ロード伯は加虐趣味がおありですか？ ますます嫌ですわ」

この男はわかっているのだろうか。私が名前も、旦那様とも呼ばないことと、その意味を。

「違う！ 確かに結婚式を途中で抜けたことは悪いと思っている。だが、それだけで離婚などっかわあ、やっぱりわかってない。」

「たかが？」

ハンナが銅鑼どらを叩く棒を手に、アベルをぎろりと睨みつける。

私はその隣で優雅に微笑みながら返す。

「だけではありません、ロード伯はあの最悪な結婚式以降も一度だって私を正妻らしく扱ったこと

はありません。結婚式をすつぽかしたフォローどころか連絡一つなく、翌朝顔を合わせた時に『すまなかつた』と挨拶ついでの一ひと言だけですませたきり。さらにその翌日、いきなり酔っ払って帰ってきたと思ったら、いきなり人をベッドに連れ込んでことを致そうとする始末。結婚式から初夜まで、平民の夫婦でもここまで酷くありませんわ。普通なら、結婚式から夫が逃亡した時点で式は中止、結婚は無効です」

すかさず、ハンナが追い打ち、ではなく補足する。

「それも莫大な慰謝料つきで離婚請求できる案件ですね。招待客だつて怒つて帰つてもおかしくないです。今回は王命での結婚式でしたから——まあめちやくちゃにしたのも王室ですけど——招待客からのクレームがなかつたつてだけで、普通なら『馬鹿にするな!』と招待客から抗議があつて当然かと」

「内心では面白い見せ物だつたと思つている方もいらつしやるでしょうねえ。まあそれならそれで、『これが本日の演目です、楽しんでいただけましたか?』とでも笑つてみせればよかつたかしら?」

ハンナの辛辣な補足にさらに辛辣さを上積みして返すと、それが余計にアベルには違和感を、モンドとマリアには言いしれない恐怖を覚えさせたようだ。

どうしたものかとマリアとモンドが顔を見合わせていると、ドアの外から声かけられた。

「モンド様、こちらにおられますか?」

遠慮がちに声かけられたのは、ここが本来なら夫婦二人が籠っているはずの寝室だからだろう。

「何だ? 用事なら後にしろ」

今はそれどころではないと、モンドが険のある声で返す。

それもそうだろう。このままでは、迎えたばかりの邸の女主人がすぐにも出て行つてしまふかもしれないのだから。

そこへ、追い打ちをかけるように、さらにとんでもない言葉が続けられた。

「王宮より火急の使いが来ております。ただ今旦那様はお出ましになれないと説明したのですが、その、至急王城までお出まし願いたいと……」

「この後に及んで……! 旦那様! 一体何と言つて帰つてこられたのですか!? まさか『一旦抜けるがすぐに戻る』とでも!」

ついに実直なモンドが爆発した。

「ち、違う! ちゃんと『今日は妻と家で過ごすから呼び出すな』と言つてきた!」

「なのに一杯引つ掛けてきたんですか?」

私はすかさずつつこむ。

「それも違う! 皆私が結婚式の最中に呼ばれたのを知っているから、今日は『頑張れ』と送り出してくれた! 酒のことは、その、同僚の一人が悪ふざけというか、『祝い酒として一杯奢らせろ』と、いつも皆で仕事あがり寄る酒場にひっぱつて行つて……私も緊張していたから一杯くらいなら。本当なら団長のアドバイスどおり花だけ買って帰つてくるつもりだつたんだ!」

アベルは慌てた様子で言い返す。

「花の一つくらい、アドバイスなしでも買って帰つてくるものです。本当に反省しているのな

立ち読みサンプル
はここまで

らば」

すぐにハンナが一刀両断する。

「無理よハンナ、ロード伯は結婚式よりお仕事が大事な人よ？ お勤めの間はご自分に家庭があることなんて忘れていらっしやるのよ？ 贈り物を買って帰ってくるなんて、思いつくはずがないわ」

私はすかさず容赦ない反応を返した。

「左様でございました。女性のほうが初夜はずっと緊張もするし、体の負担も大きいことも考慮できない生き物ですものね。下半身に従って異性を求めているだけの動物に、そんな芸当は無理でしたね」

必死で言い募るアベルに、私とハンナはどこまでも冷たい態度をとる。

既に邸の主人が人でなく動物扱いになっていているが、それを止める者はいない。

「ですが、それなら王室はどうしてまた呼び出しを？」

呆れたように会話に入ってきたのはマリアだ。

「いや、それは……何かあるのだろう」

しどろもどろになりながらアベルが返す。

（この言い方だと心当たりがありそうね。それにしても）

「旦那様でなければどうにもならない火急の事態がこんなにもですか、王城の騎士はよほど人手不足らしいですか？」

怒りがおさまらないらしいモンドが、私が言いたいことを代弁してくれた。

（そうなのよね、呼び出される回数が多すぎるのよ）

それに、もし拒否できずに初夜を強行されていたとしたら、私はことが行われた後ここに放置されていたことになる。

言葉は悪いけどいわゆる〇り捨て状態だ。最悪すぎる。というか、小説で描かれていた死に際の「違うんだー」の意味がますますわからない。

そう考えると、とてもこの似非騎士の言い訳を聞いてやる気にはなれなかった。

そもそも騎士って、酔っ払って出勤してもよいものなのだろうか？

「人手不足というわけではない、王女殿下の護衛騎士の数は多い。ただ、私だけが担っている任務があつて……その件で何かあつたのだろう」

そう答えるアベルの顔を見るに、もう酔いはさめてきているようだ。

「——それで、どうするおつもりですか？」

「どう、と言われてもそんなことは……」

モンドの問いにアベルは堂々と決まっていると答えようとしたのだろう。室内の全員がとても冷たい目をしていることに気が付いて口を噤んだ。

「今がどういう状況か、わかっておられるのでしょうか？」

「坊っちゃんまはいつからこんな人でなしに……」

モンドは怒りの声をあげ、マリアは涙ぐむ。